

『いたみ』

課題をやらないといけない
けれど、私は寝ずにスマホを触っていた。
時計の針は3を指していた。
部屋のドアから音が鳴る。
父が苦しそうにしている。
保護者として私が付き添うことになった。
静かに救急車が到着した。
どうすればいいかわからず、邪魔しないようにそ
こに存在していた。
受け入れ先が見つかり、走り出す。
いつも聞いている救急車の音ではなく、音程は一
定だった。
同時に父の心音がピートを刻む。
それに合わせて周りの医療機器も揺れる。
父は横たわって、辛そうにしている。
私はマスク越しに鑑賞する。
存在しないはずの匂いを感じる。
父は8で死は10であった。
父と目が合い、私と繋がった。
不安と安堵が一つになった。
病院に着くと父は診察室に連れていかれ、私は受
付に行つた。
父の情報を入力する。
どうか、もうすぐ50か。

誕生日少し豪華にお祝いするか。

最近仕事が忙しそうだったからな。

そういうえば、父が泣いているところを見たことが
ない。
嬉し涙も悲しい涙も。
私はよく泣く。
父はお風呂が早い。
私はとても遅い。
父は音楽ライブに行かない。
私は音楽ライブによく行く。
私と父の違いを探していた。
父は私によく似ている。

コメント
この作品はフィクションではありません。私が実際
に経験したことです。
テーマは「ロナと不完全（未完成）」です。
わざと不完全な「し」にすることで考えるプロセス
を読者に与えることができ、作品に深みと多様性が生
まれます。また、昔の人は建物を作るときに「建物は
完成と同時に崩壊が始まる」という伝承から、わざと
柱を未完成の状態にすることで災いを避ける、魔除け
のために逆柱にしたとされています。これを参考にし
て、「し」を不完全（未完成）にして、各所に完全では
ないものが存在しているという経緯があります。それ
が完成してしまっては「し」は崩壊してしまいます。
これは固い規則が存在する詩とは真逆の行動をとつて
しまつているかもしれません。

私が二人いるみたいで鬱陶しい。
頭の中で一点を見つめる。
父をずっと待っている。
そして、なにか大事なものを忘れている。
人の日常は当たり前に溢れています。当たり前の価
値というものは失ったときにしか感じることができ
ません。新型コロナウイルスによつて、私たちは当たり
前にあつた日常を壊されてしまいました。しかし、当
たり前の価値を見直すきっかけが生まれました。私た
ちは新たな日常を作つていてる途中にあると思います。
そして、これから新たな日常は当たり前になり、その
価値は平面に見えることでしょう。